

ビデオ 通信

2024年
8月8日(木)
No.4787

月・木曜日発行
月額：¥11,000(税込：¥11,880)
発行：飯澤 剛
編集：齋藤 浩一

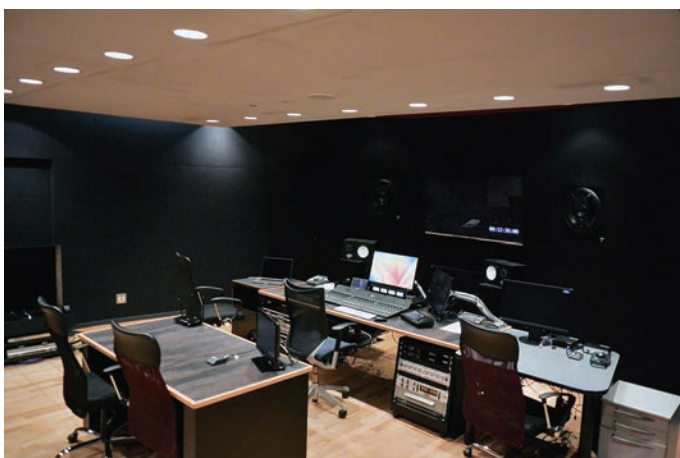
ユニ通信社

〒114-0024
東京都北区西ヶ原 3-57-17-202
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

パナソニック映像

MA1 をリニューアル

Pro Tools を 2 チェーン化して複数オペレーションを実現
ドラマ制作の撮影～編集～グレーディング～ MA をワンストップで提供



パナソニック映像(株)は1月に、東京・東品川の東京オフィスにある「MA1」をリニューアルした。これまで主戦場としてきたテレビCMや企業VP、大型映像等に加え、ここ数年増加しているテレビのドラマ制作に対応することを目的としたもの。今回のリニューアルにより、同社ではドラマ制作の撮影から編集、カラーグレーディング、

MAまでワンストップで実現する体制を整えた。従来の「MA1」ではAvid ProToolsの1チェーンによるワンマンオペレーションを行ってきたが、ドラマ制作で必須となる音響効果や音楽担当者を加えた複数人のオペレーションに対応するため、最新のAvid Pro Toolsと映像再生の役割を兼ねたハイスペックのMac Proに加え、音響効果用のMacStudioを導入した。コントロールサーフェスのAvid S1 × 3 式をフレキシブルに組み合わせることで自由な構成を可能とし、従来の企業VP等とドラマそれぞれに対応する。また、音効用に導入したMac StudioはSatellite Linkを活用して4Kなど負荷の高い映像制作の映像再生用にも使用できるほか、プラグインも一新した。さらに、KVMシステムや最新I/Oの導入により、DanteをAESに変換して「MA2」でも同等の作業が行える仕組みとなっている。従来から大きな特徴となっている広いコントロールルーム(約10人まで入室可能)とナレーションブース(3人同時収録が可能)、前室に加え、敷地内には予約制駐車場を確保していることも併せ、ドラマ制作に適した環境を整えたことで、同社では“ドラマ案件でのさらなるお役立ち変革”を進めていくという。

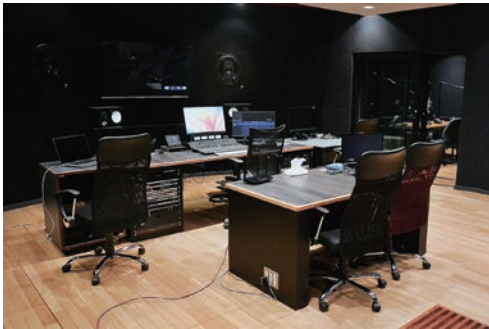
ドラマ案件へのさらなるお役立ちを目指して

パナソニック映像では、東京・東品川の東京映像センター内に編集／カラーグレーディングスタ

ジオ×3室とMA×2室を有している。

今回、「MA1」をリニューアルした目的について、プロダクショングループ GM / エグゼクティブプロデューサーの西山 誠氏は「まずは従来の ProTools システムが更新時期に来ていたことがあります。さらに、ポストプロダクションや MA の将来的な展望について議論している中で、月9ドラマなどを担当しているカメラマンの貝谷慎一が加入したこともあり、ドラマ制作の引き合いが非常に多くなってきました。従来の「MA1」は、当社の主戦場である企業 VP やテレビ CM、大型映像に対応するため、ProTools × 1 チェーンによるワンマンオペレーションで作業していましたが、ドラマの場合はメインのミキサーに加え、音響効果や音楽担当エンジニアとの同時作業を行うために旧システムでは対応できず、ドラマ案件の MA は外部で行われていました。放送局のお客様からも「1つの拠点で全部仕上げられる環境が欲しい」との要望をいただいております。今回のリニューアルにより、撮影から編集・カラーグレーディング、MA も含めたトータルなドラマ制作をワンストップで提供できる環境を整えました。ドラマ案件にさらなるお役立ちができるよう意識を変えていかねばと考えています」と語る。

S1 × 3 式で自由に組み換えてフレキシブルな運用



今回リニューアルした「MA1」(←写真)では従来、オーディオ専用とビデオ再生用のマシン × 2 台体制で運用していたが、昨今のマシンスペック向上を背景として、今回は最新の Avid ProTools Ultimate|HDX Ver.2023.12 を導入するとともに、オーディオ/映像システムをハイスペックの Mac Pro × 1 台で構成することで、シンプル化を図っている。

システム構築を担当した伊藤忠ケーブルシステム㈱の高沢雅人氏は「オーディオとビデオを1台で賄うスタイルによって、誰にでも使いやすい、わかりやすいシステムを目指しました」とする。

コントロールサーフェスは Avid S1 × 3 式を導入。従来の VP や番組系で使用する際には1人のミキサーが3台を専有する一方、ドラマ制作で音響効果や音楽担当が入る時には Satellite Link を用いて1台ずつ別々に使用するなど、S1 をフレキシブルに組み換えて使用できる。

また、音効用システムとして Mac Studio や最新のオーディオインタ



MA1 のオーディオ/映像システムを1台で賄う最新の Mac Pro

MA1 のシステム構成

▽音声卓: Avid S1 Control Surface × 3 ▽ラージスピーカー: musikelectronic geithain/RL901K × 2
 ▽スモールスピーカー: AVSNTONE/CLA-10 × 2 ▽DAW: Avid ProTools Ultimate|HDX Ver.2023.12
 ▽メイン ProTools 用 PC: Mac Pro 2023 ▽音効用 ProTools 用 PC: Mac Studio 2023 ▽OS: macOS Ventura 13.6.3
 ▽ビデオ再生: Non-Lethal Application/Video Sync 5 ▽プラグイン: Waves Diamond/RX Post Production Suite 7.5 (RX10) /Auto-Align Post 2/Pitch'n Time Pro/Altiverb 7 XL/Speakerphone2



S1 を自由に組み替えることにより、業務に応じてフレキシブルな運用が可能（左と中）／ MA2 でも MA1 と同様のオペレーションを実現とする KVM システムと最新 I/O（右）

ーフェース「MTRX STUDIO」を導入。Dante を AES に変換することで、従来のシステムに渡す仕組みとした。さらに、「MA1」で長尺の 4K プロジェクトなどの高負荷な作業を行う際にはこの Mac Studio を映像の送出機としても使用できる。

なお、この Mac Studio は、KVM システムによって今回はリニューアルしていない 7.1ch サラウンド対応「MA2」でも使用できる。

伊藤忠ケーブルシステムズの山田裕治氏は〈IHSE の KVM Extender を導入することにより、音効用の Mac Studio は「MA1/MA2」の空いている部屋で取り回して使うことができます〉とする。

さらに、定番から空間表現、整音特化、ラウドネス管理など、プラグインも刷新している。



伊藤忠ケーブルシステムズの山田裕治氏（左）と高沢雅人氏（右）

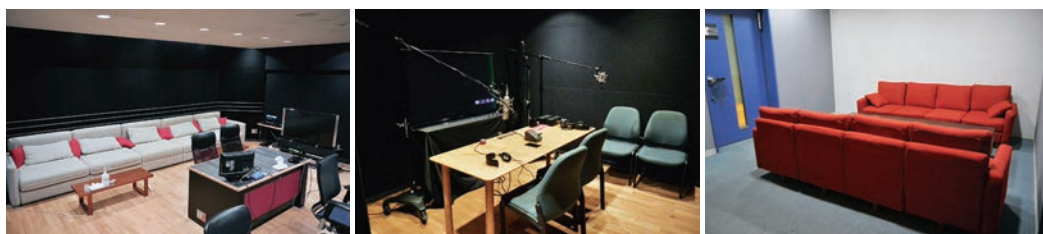
広いコントロールルーム、ナレーションブース、前室／敷地内駐車場も完備

一方、パナソニック映像の MA は、MA1（約 64 m²）、MA2（約 56 m²）、ナレーションブース（最大 3 人まで同時収録が可能）、前室（会議スペースとしての使用も可能）ともに、すべて広いスペースを有していることが大きな特徴となっている。

プロダクショングループ 東京制作チーム チームリーダー／カラリストの佐藤倫子氏は〈「MA1」は、大掛かりな案件でステークホルダーやクライアントが多い時でも、10 人以上が十分に入れる広さになっており、テレビ局関連のお客様からも、スペースの広さや天井高、居住性の高さを評価いただいています〉とする。

また、今回のリニューアルによって OS を含むマシンスペックが大幅に向上したことから、以前と同じ作業でもスピードアップし、働き方や働く時間にも貢献しているという。

（次ページに続く）



いずれも広いスペースを有する（左から）MA1 のクライアントスペース、ナレーションブース、前室

さらに、敷地内に無料駐車場（予約制）を確保しており、作業が深夜に及ぶこともあるドラマ制作にとって大きなメリットとなっている。

ポストプロとしての領域を拡大

「MA1」のリニューアル以降、同社ではドラマ案件の引き合いがどんどん増えているという。現在放送中の「笑うマトリョーシカ」（TBS テレビ）での撮影を手がけており、昨年は「あたりのキッチン！」（東海テレビ／フジテレビ）をはじめとした複数のドラマに撮影、編集／グレーディング、MA で包括的に対応。「MA1」をリニューアルしたことにより、ワンストップでサービスを提供している。

西山氏は「ワンストップサービスのメリットは、撮影／編集／MA という個々の作業ではなく、ワークフロー全体で可能な“フレキシブルな調整”だと考えています。実際、プロデューサーやディレクターからも「ハンドリングしやすい」という評価をいただいています」とする。

「MA1」も順調に稼働しており、連ドラの業務が入ると朝から晩までほとんど貸切状態、編集室もMA もひっきりなしに動いている状況だという。

西山氏は「ポストプロ領域において、当社はこれまで「全方位的」に対応してきましたが、CM やドラマなど常にハイクオリティを求められる分野にプレゼンスを拡大し、存在感を高めなければ生き残れないという危機感があります」と語る。

新しい制約を考慮したスケジューリングに試行錯誤

一方、ドラマ特有の厳しいスケジュールに関して、スタッフのスケジューリングなどを担当する佐藤氏は「昔はMA が終わったらMA で完パケに音を落として納品物にしておりましたが、今はほとんどがデジタルメディアでの納品になっており、MA が終わった後に1つのメディアにまとめる、様々なフォーマットに変換する工程も増えています。そこから締め切りを逆算すると、スケジュールはさらに厳しいものになります」と話す。



（左から）パナソニック映像の佐藤倫子氏と西山 誠氏

また、西山氏は「コンプライアンスや労働時間など今までになかった制約がある中で、お客様とも連携を取りながら、今の働き方に極力合わせる形で進めるよう模索しています。当社では、業界の中でも特にコンプライアンスや働き方に関して先進的な取り組みを進めていこうと考えており、まさに今試行錯誤しているところです」としている。

なお、同社では現在、ミキサーやオーディオエンジニアを募集しているという。

西山氏は「企業VP やテレビCM、ドラマ、大型映像、プロジェクトマッピング等のイベント系、配信など、様々な業務に幅広く携わりたいという人には非常に良いフィールドではないかと考えています」と話している。

◇パナソニック映像 <https://group.connect.panasonic.com/pvi/>

東京オフィス 東京都品川区東品川 1-3-12